

アースキン・コールド

ウエルの小説について

太田藤一郎

第一次世界大戦にアメリカが参戦したことは、アメリカ社會の各層に大きな影響を及したが、文壇においても、烈しい愛國心は若い文筆家達を戦線に駆りたてたりなどして、愛國主義的ながごきがあった。併しながら、休戦後の繁榮と享樂の生活の背後には一九二九年十月の大恐慌が待つていた。それは英國よりもずっと遙かに甚大な打撃をアメリカに與えたものであつて、アメリカの經濟界はうちめされたし、民衆はなすところを知らず混亂のただ中にたたき込まれた。實際に戦争生活を體驗した者は、戦線の悲惨な深刻な荒廢した生活から味はされた虚無的な幻滅的な氣分を拂ひのけることが出来ず、彼等は次第に積極的な社會的關心を失つていつたし、文學の世界にあつても、休戦からこの大恐慌に至る間には、消極的な否定的な傾向に流れていつた。大多數のアメリカの作家達は知識人としての在り方についての幻想を喪失したもののようである。

しかしアメリカ文學の世界におけるこの消極的、否定的、或は暴露的な行き方の反動として、大恐慌後には、積極的に社會をみつめ、社會とむすびつかうとする動きが、若い世代の間に生れて來たのである。ジョセフ・フリーマンも指摘しているように、個人をテ

ーマとしたものよりも、社會的、政治的テーマのものが、さらに興味があり、さらに意義があり、さらにノーマルなものになつたのである。勿論、この社會的テーマというのは、社會の人達の全般的な經驗であるということの意味している。不況のために失業して落ちぶれて行く労働者の生活や、生産に對して不満を抱き、ストライキをやる労働者の生活の偽らない姿を知つて、アメリカの小説を愛する讀者は殆んど皆深い感銘をうけたのである。作家と労働者とのむすびつき、そして労働者の闘争及び彼等の生活の問題は、とりもなほさずまた作家達自身の問題でもあるという自覺、それに廣くして深い一つの文學運動をひき起した。政治というものは、自分達の生活から縁の遠い何物かでもなければ、新聞や黨の宣傳のさもしい遊びでもない。政治とは自分達の最も大切な思想の糧そのものになるところのものだということ、或る作家達は少くとも感じ始めたのである。即ち三〇年代以後には、社會意識に燃えた作品が世にとはれ、文學の動きは虚無から積極性へと展開されていつた。若くして、しかも戦争の苦痛やそれより起る虚無を知らない一群の人は社會を遙かに健康的にみつめ、希望を持ち、アメリカのリアリズムをなほ一層強化し完成しようとした。是等の一群の人達として、トマス・ウルフ、アースキン・コールドウエル、ジョン・スタインベック、ウイリアム・サローヤンなどの名をつらねることが出来るよう。

アースキン・コールドウエル (Eugene Caldwell) は一九〇三年十二月、ジョージア州アトランタ南方の郵便局まで八哩も離れているといふ山間に生れた。彼の父は長老教會の牧師で北カロライナ人

であり、彼もまた放浪者であつて、一、二年毎に南部の教會から教會を轉々と移つてゐる。アースキン・コールドウエルは十六歳まで大體においてミシシッピー河以東地方で生活をして來たのであるが、父との生活は彼を典型的な放浪者に育て上げた。十七歳のとき、南カロライナで學校に行くために家からはなれた。しかし彼は學校で勉強するよりも、貨物列車にただ乗りの旅をしてまはつたりして多くの時間を費つた。彼はヴァージニア大學に進んだが、公開賭博場の手助けや用心棒をやりながら、二年間位大學にゐた。彼は實に色々な職業をやつて來た経験のもちぬしで、百姓もやつたし、紡績工場や木材工場の職工もやつたし、或はまたコックやボーイ、或はフットボールの選手をやつたりなどしたこともあつた。彼は學校をやめて、アトランタ・チャールズの通信記者となり、結婚をした。しかしながら、新聞といふものは創造的な著作ではなく、もし何か創造的に描かうと思えば、新聞はそれに相應しい職業ではないといふことを發見した。創造的に書く唯一の方法は、ペンをとる作者の心がまえが先づ創造的でないならばならないこと、そして如何なる犠牲をはらつても、新聞記事的な行き方よりも一歩先じなければならぬことであると考えた。それ故、彼は勇敢に彼のこれまでの生活環境からはなれて、その過去の生活を正しくみつめ、一應検討してみる必要があると感じたのである。そこで彼はメイン州にもぐり込んで百姓となり、家族を養ふために馬鈴薯をつくり、材木も伐採した。そして自分の書いたものが世に出版されるまでは出て來ないといふだけの腹をきめたのである。このやうな悲壯な生活にはいつて歲月は流れていつたのであるが、三年目に彼の或る作品が

認められて三百五十弗で買はれるといふ彼にとつてはうれしい日が訪れた。そしていよいよ文筆を以つて世に立つといふ彼の生活が始つたのである。

やつてみたいと希望してゐることをやれる人はこの世では極めて少ないのであるが、コールドウエルはこの小數者の中の一人である。彼は行つてみたいと思つた土地は殆んど行つてゐるし、彼が接した各層の人達を通じて、ヴァージニア大學在學中に學んだ社會學を、現實の社會面において實地に経験したのである。少年時代、青年時代にかけて、彼は南部の各地を轉任してゐるが、その範圍は六州の廣きに亘つてゐる。彼は是等南部の六つの州をば一放浪者としてわたり歩いてゐるが、藝術家としてまた觀察者としての心、美と眞とを求めまた現實があるがままに正しくみつめようとする心をば一應忘れなかつたのである。書きたいといふ欲求のみが、彼を放浪させたのだし、そしてまた書きたいといふ欲求のみが、彼の放浪性を中和させることが出來たのである。彼の作品といふものは、彼がこれまで轉任し、放浪してまはつた土壌からうまれてゐる。彼の感覺は、小説家にふさはしい鋭さを持ち、環境の内部にひそむ眞實を引き出さうとしてゐる。筆をとつて以來、彼は既に短篇小説、長篇小説、旅行記、社會研究など二十冊も出版して居り、これらの作品は十二ヶ國語に翻譯されるまでも現代世界に深い感動を與へてゐるのである。

もともと、彼は短篇作家であるのだが、ジョーチャ州を背景にして没落していく貧農白人一家を描いた『煙草街道』(Tobacco Road, 1933)といふ長篇小説によつて、作家としての彼の名聲は決定的な

ものとなつた。この小説はニュー・ヨークのプロードウェイで脚色上演され、一九三三年十二月以來七年五月といふ長期興行記録をうちたて、その成功は全く信じられさうにもない位の大きなものであつた。「煙草街道」は、南部諸州における農業の不況によつて、殆んど人間以下ともいへる、畜生にも等しい生活状態に追ひやられ、ジリジリと破滅して行く貧農白人ジーター一家をめぐる物語である。代々土に生きて来たジーター老農夫、飢餓に迫られながらも尙ほ土を捨てることが出来ず、彼の多くの子供達は父親を見限つて町に去り、その消息すらも分らない。毎年春が訪れて来て、遠くに燃える野火をながめ、堀り起した土の香が匂ふころになると、今年こそは今年こそは何んとかして種を付けてみたいといふ衝動にかられながら、馬を借りることも、肥料や種子を買ふ金もなく、むなしく逝く春を惜しまなければならぬ。かうしたジーター一家のドン底の生活——それは自ら死を待つより他致方のない生活ではあるが、黒ん坊達でさへも笑の種にしてゐる程である。彼に残された唯一のものは、いまはただまさに涸れ盡きんとする僅かに一としづくの性慾のみである。彼は大地に限りなき愛着を持ち、最後まで土に生きようとするが、自ら放つた野火のために家もろとも焼け死んでしまふのである。ジーターは十二歳になつた彼の娘パールを石炭場で働く労働者のロブに、布圍と一ガロンの油と一週間の給料と引替に嫁に賣る。蒼い腫と、背に垂れてゐる長いブロードの髪、この界限では美しいパールにたいしてロブはすつかり參つてしまふのであるが、パールはロブの執拗な性慾を全くうけつけない。女説教師と自任する三十九歳の後家ベッシー、空をむいてゐる彼女の鼻の孔は

面妖を極め、誰も彼女を相手にしない。ベッシーは亡夫の遺産八百弗を全部はたいて自動車を買ひ、ジーターの息子デュードの歡心を得て結婚する。デュードはまだ十六歳の臍白小僧である。ベッシーに言はせれば、彼等の結婚は神様の思召ださうである。デュードは買ったばかりの新車を一週間ばかりのうちに、見るも無残な程にガタガタにしてしまふ。寝臺の上でデュードを求めベッシーは年甲斐もなくあさましい。パールの姉のエリイ・メイは兎屑の娘であつて、誰からもかえりみられない。十八歳になつても賣れ口もなく、ジーター家にとどまつてゐるのであるが、彼女には性慾だけが目ざめてゐる。パールが町に逃げ出した後のロブの許に、一目散にとんで行く。……この小説の中に現れる人物は自己を反省するといふことの出来ない野性的な教養のない者たちばかりであつて、文明の動きにマツテすることが出来なくて、荒地にしがみつき、自滅の日を無爲に待ちながら、来る日来る日をただうごめいてゐるにすぎない。このような生活をやつてゐる種類の人達はアメリカのどつかの片隈にゐるのである。コールドウエルはこの現實を促え來つて、それを有りのままに提示してゐる。しかも、彼は初めから最後まで、作者にはあわれみの情がないのかと疑はしめる位に、これでもか、これでもかといふ調子で、ぐんぐんと讀者に現實をぶちまけてゐる。けれども、この畜生の様にうごめいてゐる人間の醜惡な生活をぶちまけた吾々讀者は、どうしたことが少しもその醜惡さに胸の悪くなるといふやうな堪へ難いものを感じないのである。むしろ、人間的な親しみとヒューモラスなものを感ずるのである。これはヒューモラスに描寫された素朴な性慾によるものであらうし、作者の巧な表

現になる素朴な性慾の諧謔が、この小説を成功せしめたものと云へるのである。もはや手のほどこしやうもない程ポロポロになつた道徳がちよつぱりと、神様は彼等の不幸をいつかは埋合せて下さるだらうといふ感傷的な信頼が、彼等に見受けられるが、いくらお祈をしても食へない、これが現實の姿である。だから無知にそして執念深く開拓してきた土に愛着を感じ、すがりついてゐる間に、神様に助けられることもなく、望なき犠牲者となつて行くことに気がつかないのである。女説教師ベッシーを通じて、作者は神をカリカチュアして居り、この物語の背後の力強い思想となしてゐる。作者は底知れない人間愛慾の逞ましさを貧窮な生活にあえぐ人たちの生活感情にからませ、棉の栽培が出来ず、餓と闘ひつつ破滅していく白人農夫の世界を、ほろ苦いヒューマアでもつて描いてゐると共に、行きつまつて手も足も出ない農民の實態と、是等の農民の行きつまりは、白人黒人を一緒にした大規模な集團農耕化によつて打開される、といふことを示唆してゐる。文學藝術におけるリアリズムは、現實を描かうとする傾向をいふのであるが、その現實描寫の方法には二つの様式が含まれてゐると思ふ。その一つはある時代の現實社會の外部的特徴を描くことによつて、具體的にその社會の姿を示さうとする方法と、いま一つは、その現實の内部に滲透してゐる歴史的社會的内容の内的特徴をより深く掘りさげて開示するといふことである。この作品において作者の描寫はこの第一の様式にはかたつてゐるが、第二の様式までには深く立ち入つてゐない。この點において南部の農民生活をリアルに描かうと企圖する作者の創作態度には、リアリズムに徹しない弱さがうかがはれると思ふ。

現實を凝視することにおいて、現實を拉し來る點において、リアルにならうとしたコールドウエルは、現實の醜惡な面に對して決して背をむけようとはしない。南部の黒人の生命の扱はれ方の無難作さは、白人ならば目をそむけてかかはりたくないといふ態度をとるのが普通であるだらうが、彼は黒人がうける殘虐な待遇をみのがすことなく、テーマとして冷靜にとりあげて、その善惡の批判は讀者に一任してゐる。「昇る太陽に跪く」「Kneel to the Rising Sun」  
「キャンデマン・ソーカム」「Candy Man Bessum」「死んで行く」「Slow Death」「靑少年」「Blue Boy」「土曜日の午後」「Saturday Afternoon」その他一連の彼の短篇は、黒人にたいする白人の暴虐をリアルに描いてゐる。「昇る太陽に跪く」(一九三五年)は彼の短篇小説のうちでも比較的長いものであつて、白人小作人ロニーは地主のアーチからの分前が少くて、自分の細く尖つた顎で喉に穴が開けられる程貧しい生活をしてゐる。ロニーの父親は空腹に堪えかねて、夜中家を抜け出し、アーチの豚小屋のえさを食はうとして豚に食はれて死んでしまふ。同じ小作人で黒ん坊のクレムはロニーにたのまれて、一緒にロニーの父親を捜してゐるうちに、彼をば主人の豚小屋で發見する。クレムは正義觀の強い男で、小作人にみじめな生活を強要して遂にこのやうな悲劇を起させた主人をロニーに呼びにやらせる。現場にやつて來た主人のアーチは、クレムを日頃から生意氣な奴だと目をつけてゐたところでもあり、夜中に起された腹立ちも加つて、クレムを棒でなぐりつける。クレムは正しいことを言つたと信じつつも、生命の危険を感じ、森の中にかくれる。道上したアーチは近所の地主達の應援を求めて、ロニーに

クレムの逃れた場所を白状させ、樹上にかくれてゐたクレムに集注射撃をあげせる。クレムはさし昇る太陽の光をあげて地上にドツと落ちて落命してしまふ。——當然の如くに行はれる白人の黒人虐待、彼等の非人間的な横暴さ、搾取のために徹底的に萎縮してしまつたロニーの食はんがための裏切りと卑屈な服従、黒人でありながらクレムの旺盛な正義観、これはコールドウエルの短篇中でも優れたものであつて、そのリアリスティックな描寫と、テンポの早い筋の展開は、讀者の興味をぐんぐんたかめて、息もつかせないやうな劇的効果を生み出してゐる。不正とは如何なるものであり、その不正から如何にすれば脱れることが出来るかを知らない是等の犠牲者である黒人や貧乏な白人達に對するおはれみのこころが、作者の憤怒の情を知らず壓えてゐるやうである。「死んで行く」に出てくるマイクとデーヴといふ二人の黒人浮浪者、街で疾走して來たセダンにデーヴがはねとばされて死んでいく。自動車の運轉手も、通行人も、此奴らは負傷したふりをして金をせしめようとしてゐる浮浪者のであひだと思つて、病院にかつぎこまうとしない。巡査がやつて來て棍棒でマイクを追ひ立ててしまふのである。作者は白人社會の冷酷無慈悲さにたいするいかりを、黒人への彼の同情でもつておさへつつ、何氣ない様子で以つて、黒人同志の間に交流するお互にいたはり合ふ人間的な愛情を生々しく現してゐる。——「五十仙のいれてあるところをお前が知つてるか、おいら確めたかつただけよ、マイク、」と彼は言つた、「五十仙はおいらのパンツの右ポケットにあるぜ」——デーヴはマイクにかう云つて、彼の腕に抱かれて息をひきとる。「青い少年」では、丈の低い、やせた、青い皮膚をした十

七歳の黒ん坊が、グラデイ家の新年の午餐に集つた人達の食後の無聊をなくさめるために、箸でたたかれて、豚殺と猿まねを死物狂ひにやつて遂に死んでしまふのである。或は、まるで雜草でも切り倒すかのやうに白人巡査によつて、やすやすとかたづけられる黒人を描いた「キヤンデイマン・ピーカム」、或は、黒人のリンチをテーマにしたものうちでは最も怖ろしい物語である「土曜日の午後」においては、最早恐怖は淡々と軽く描寫されて行くリンチそのものにはたいして感じられなくて、むしろものうい午后から救はれてよろこび勇んで見物にはせつけることによるこびを覺える白人達の冷めた心よるこびそのものの中に恐怖が存在してゐる。また「クリステイ・タッカーの最後」：「The End of Christy Tucker」では、黒人タッカーが自分の家の周圍に垣根をつくつたこと、ラヂオを買つたこと、タッカーの女房が鶏を飼つてゐることなどの理由で、親方のリー・クロスマンに射殺されてしまふ。作者は一人の人間の生命を左右するクリステイと親方の對話を簡潔で力強いものとし、そして南部の白人は精神的に低級であつて、農場の經營が下り坂になり、小作人の黒人がへそくりをため出すと、白人の頭のひくさはリンチ沙汰をかもすといふ事實を示してゐる。

黒人のリンチをテーマとした是等一連の作品には、みじんの誇張宣傳もみうけられない。作者は大いなるいかりのこころを以つて描寫してゐるが、そのいかりは注意深くかくされてゐる。だからして、精神的には低級で經濟的には下り坂になつていく南部の白人達が、自分達の無知と貧困の中で自尊心を尙ほ保つていくために、黒人を虐待するといふ恐ろしい習慣制度にたいして、鈍感な讀者なら

きつといきどをりと激しい反感を感じない程である。「昇る太陽に跪く」や「クリステイ・タッカーの最後」における、貧困と搾取とにあえぎながらも自分達の解放のために闘つたクレムやタッカーの描寫は、典型的な情勢における典型的な性格の描寫であるといふことが出来、コールドウエルの作品中でリアリスタックといふ言葉が惜しげなく與えられるとするならば、先づ是等の作品にたいしてなされるのではないだらうか。コールドウエルは黒人にたいしていつも深い同情をいだいてゐるが、それは既に白人の親方たちが失つてしまつてゐるところの人間性と生活力とを黒人達が失ふことなく保持してゐるといふことを感じてゐるからである。追ひ立てられ、咎うたれ、射ち殺され、リンチされるのは黒人であるけれども、實際はかういつた事件のある度ごとに、最も深く心に傷痕を残されたのは凋落していく白人自身であつたのだ。

コールドウエルの作品を論ずるにあつて、いま一つ見のがせないものは、彼の性慾の取扱ひ方である。この點に就いては、さきに彼の「煙草街道」において、素朴な性慾のヒューモラスな取扱ひ方に就いて觸れてをいた。この作品の中における人物の結びつきは、性慾による結合であつて、決して戀愛的なそれではない。例えば石炭場の労働者ロブとパール或はロブとエリイ・メイの結合、小説教師ベツシイとデュードとの結合などは、いささかも戀愛的な要素はみられない、何んとしてもそれは本能的な性慾である。このことは彼の他の短篇小説、「マーサ・ジャン」「Martha Jean」「新しい小屋」「New Cabin」などにも明かにうかがはれる。即ち「マーサ・ジャン」においては、雲の降りしきるある寒い冬の晩、不良の巢窟である

ニツクの店に職を求めて田舎から家出して來た小娘マーサ・ジャンが、雲にぬれ、寒さにふるえながら、食物を求めてはいいつて來る。ジャンは未だ世の中を知らないおほこ娘、ニツクはよい鴨が舞ひ込んだとばかり、早速、ストーブに暖をとつてゐた不良達を追ひ出してしまつて、ジャンを自分のものにしよつとする。ジャンは逃れようとしてニツクに抵抗するが、遂に最後の悲鳴をあげて、二階の眞闇な部屋で、純潔を失つてしまふのである。——「一度マーサ・ジャンが悲鳴をあげるのを聞いたと思つた、併し降りしきる雲の中に立ちどまつて、きき耳を立てたが、私は二度と彼女の悲鳴を聞くことは出来なかつた。それからのちは、あの娘の悲鳴かそれとも建物のするどい角にあたる風の悲鳴か、私には判らなかつた」——ニツクの不興を買ひながらも最後までふみとどまつていた一青年を私といふ人物にしたて、作者はジャンの征服されるシーンを不可避的な運命として冷靜に結んでゐる。この作品には、典型的な情勢が一應とりあげられ描寫されてゐるが、それ以上を出てゐない。かういつた社會の不合理や非理性的なものに闘ふといふ性格描寫がなされてゐないところに、彼の「煙草街道」におけると同じやうに、リアルに透徹しきれなかつた一連の弱さがみとめられる。また、ニツクより強い男、しかも美青年が現れて、まさに散らんとする娘を救つて、二人が戀をし合ふといつたやすつぽい偶然性を作者はとりあげてゐない。男の本能的な性慾の犠牲となつて、貞操を失ふといふ必然的な悲劇的結末をつけてゐるのである。コールドウエルはこのメロドラマ的な要素を多分に含んでゐるこの物語を、客觀的な物語に變えてゐるのである。併しこの客觀的なといふものの皮を一枚はい

でみると、作者のあはれみのところが、この物語の根底にひしひしと流れてゐることを感じないではあられない。「新しい小屋」においては、新しい小屋が出来たらそこに移り住むことを楽しみにしてゐるダビイとジェニイといふ夫婦、ジェニイを強く求めてゐるポニイは、ダビイが新しい小屋に行つて働いてゐる晝間、幾度となくやつて来てジェニイを自分のものとしようとする。結局ダビイもジェニイも沼にのまれて悲劇的な最後をとげてしまふが、ポニイがジェニイに執拗に求めるものは戀愛ではなくて本能的な性慾である。性慾描寫といへば、彼はその幾つかの作品において、明るく抒情詩的に若い男女の性慾を描いてゐる。例えば毒をつんでゐる娘の素足に云ひしれない性慾を覚え、背中に投げ入れた毒を取り出してやり乍ら急に愛情を感じて娘を抱き締める「毒の季節」"The Strawberry Season"、或は、桃の實の熟れた果樹園で、蜂にさされた女學生の肩から毒を口で吸ひ出してやつてゐるうちに、性慾にかられて抱擁し合ふ「訪れ人」"The Visitor"などでは、まだ汚れを知らない若い男女が、不圖した機會から結ばれるものであつて、ここに描かれる性慾は純眞で明いものであり、愛情のもてあそびは感じられない。彼を有名ならしめたものは、彼の奔放な性慾描寫だと思つてゐる人があるが、それは誤つた考へである。彼の作品を注意深く讀んでみればこの考へ方の誤に氣がつく。たしかに性慾描寫が彼の作品に趣をそへてゐる、しかし性慾描寫が彼の作品を全面的に構成してゐるものではないのである。「烟草街道」などに見られる性慾は、黒人虐待が白人地主達の精神の低級さと經濟的行きつまりの結果現れるものであると同じやうに、性慾も衣食に事欠く白人達の活氣の

ない將來の希望もない貧窮な生活からの解放の現れなのである。是等の人達にとつては、性慾のみがその貧しい生活の中で残された唯一のよるこびであり冒險なのである。

コールドウエルの作品には、いま一つ、「人々の群」"Masses of Men"などの一連の作品にみられるやうに、長年の間下積の生活をして来た勞働者が、貧しい生活に生命をすりへらし、樂な生活をしたといふ夢も實現することなく事故のために死んで行くといふ、所謂ジリ貧にあえぎつづ辛うじて生命をささえてゐるが、その前途には死の運命が待ちかまえてゐるといふ種類のテーマである。これは黒人を虐待し殺してしまふ殺人事件と類を同じくするものであつて、この種勞働者の生活悲劇も彼等を次々に追ひつめ遂には死にいたらしめる殺人行爲にほかならない。人間の生活がかういつた結末に終るのはまさに大いなる悲劇である。コールドウエルの作品の殆んど大部分のものは、悲劇的な結末をつけてゐる。これは彼等の作品を特色づける一つの點であるかもしれない。勿論、現實社會には悲劇的要素もまたさうでないものもあるであらうが、彼をしてさらに興味を感ぜしめ、彼の心をさらにひきつけたものは、人生の悲劇的な様相であつたにちがいないといふことは想像が出来るのである。放浪生活を遊じて、下層社會の生活を體驗し、その生活を限りなく變じた彼自身としては、人生の悲劇的な様相には彼自身の生活に近いものを感じた何物かがあり、そこには深いあはれみのところをよせたり、共感することの出来る何物かがあつたことは疑ひ得ないのである。

南部六州の轉々たるさすらひと、種々の職業に自ら従事したこ

と、そしてその職業を介して、勤勞者大衆の生活にぢかに接することの出来たコールドウエルは、勤勞者大衆の感ずるよろこびもかなしみも共感することが出来たし、人生の勉強をする機会を豊かに持つたのである。作品は環境の所産であり、環境によつて支配されると共に、作品が環境を支配するといふことが言へるが、彼の作品において、この言葉があてはまる。彼の作品は南部の社會環境が典型的に反映してゐるといつても過言ではあるまい。彼の作品に取扱はれてゐる人物は、吾々と同じ世界に於て呼吸してゐる人物ばかりであつて、彼等の感ずるところのものも、彼等のなめるところの苦惱も、それは一脈吾々のそれと相通するものであつて、是等の人物にたいしても、または等の人物が感ずるよろこびにもかなしみにたいしても、吾々は非常に身近かな親しみを感ずるのである。彼によつて描かれるところの人物は決して明日の心配をせなくてもよいところの上流階級、吾々とは縁の遠い特權階級ではない。決してそんな甘つちよらしいものではない。貧困によつて生命をすりへらしつゝ、一日一日を命がけで闘つてゐる勤勞者大衆なのである。彼は斯様な世界に入りこんで、首尾よく豊富な材料を獲得し、彼の作品のテーマとなし了えた小説の存在理由は何處にあるかといふと、面白いといふことを通じて、讀者を感動させ啓發させるところにあるのだといふことがよく言はれてゐるが、面白いとか、啓發させるといふことは、小説の仕組のところにその原因がある。一般の讀者が小説を讀んで面白いといつてゐるのをよく聞くことがあるが、かういふ場合大抵それは筋が變化に富んでゐて面白いといふことを意味してゐるやうである。それはその小説の仕組において、多くの偶然性を

もつて來たといふことである。コールドウエルの作品には斯様な意味の面白さといつたものはない、即ちそれは彼があまり偶然性といふものを彼の作品構成にあたつてとり入れてゐないといふことである。彼は現實的世界の中の自然や人事を有りのままに描いて、讀者をその眞實性のもつ力によつて感動せしめ啓發せしめようとする。彼の作品構成は單純で簡明である。彼の短篇の大部分のものは、事件に意味上の準備を與える廣告的部分なしに特殊な開始、クライマックスも豫想通りにはこぼれて、大體において常識的である。敘述にあたつては、創造性に乏しく、感覺のこまやかさがみられない。従つて彼の作品にはともすれば荒削りなごつごつした感じがあつて、文學作品としてのキメのこまやかさといつたせん細なうつくしさは感じられない。

彼の作品にとりあげられてゐる野蠻な白人は決して本當の悪黨ではないし、彼が不思議な程心を傾けて描寫してゐる貧乏な白人達の愛慾についても、この愛慾によつて、貧窮のためにいためつけられた生活力が、抵抗しがたい墮落のさなかにあつても、なほ生きのびていくことが出来ることを彼はみとめてゐる。貧困生活から生ずる人間の不精さといふものが、もし性的衝動によつて克服され生活へのエネルギーとなるとするならば、性慾もまた捨て難いものといはなければならぬし、斯様な性的衝動にたいするコールドウエルの特殊な感じ方は、彼の作品を支配するものであり、作品の中に取り上げられた好色的な要素が彼の作品を成功させてゐる。南部の貧農の生活のはかなさを知つたコールドウエルは、それが動機となつて彼の生活はコムニステックになつて行つたが、彼の作品には斯様な



な主義主張は表現されてゐない。リアリスチックな立場にたち政治性をもたうと望みながらも、彼の感覺の抒情的な甘さにわざわいされて、彼の思想ならびに彼の表現には、客觀性の統一がみられないし、現實の内部を深く開示しようとするリアリティも現はされてゐない。彼には「あるがままの人間」は描けるのであるが、「あらねばならぬ人間」は描けない。彼の描く人物は、作者の視野と同情の中にはあるけれども、喜劇的な人物として、或は惡黨として、或はおどおどした忠實な下僕として現れてゐるにすぎない。眞の人間を感ぜしめるやうな典型的な代表者としての英雄の姿はみられないのである。イデオロギー的にはコムニステイックにならうとしても、彼の創作においては積極的な主人公を創造する能力をもたない、ただ單なる批判的リアストにすぎなかつた。それ故一時ソ聯からも高く買はれたことのある彼の評價も、ソ聯の社會主義的リアリズムの光に照らされて、はかなく消えていかなばならない運命にあつたのである。

筆者 教養學部助教 櫻

### アメリカ現代作家論

## オニールと海 (その一)

木村俊夫

ニュージーン・オニールは「海を眺め、潮の香をかぎつつ」創作の筆をとつてゐると曾つて或る評傳が傳えた事がある。又アイネスト・ポイドはオニールの「全人間は船乗りの氣質によつてつくられてゐる」とも云つてゐる。オニールの経歴をみれば事實彼が海と甚だ深

い因縁を持つてゐる事が了解出来る。

さて彼の作品をいくつか見て行く内に、そこには甚だ遠いはるかな魂の漂泊とでも云つたものが看取されるのである。彼は又生れついでより甚だしく放浪癖のある人物であつたらしい。彼の實生活——わけても多感な青春時代における放浪は、後のオニールの作品の基調と同質のものであり、この放浪がオニールという「人」と「作品」とを形成するにあずかる所甚だ多かつたに相違ない。

今少し彼の青春時代を回顧してみたいのであるが、これはオニール自身の手記を通じて行ふ事が、簡單且確實であろう。プリンストンを中途退學、ニュー・ヨークの通信販賣會社の書記をもやめた彼は、中央アメリカの西領ホンジュラスに金鑛採掘に赴いた。一九〇九年の事であつた。六ヶ月たつて、金を手に入れるどころか、マラリヤにやられて、故郷に送還されてしまつた。それから巡業劇團の助監督をやりもした。「その後で私の最初の船旅が行われた——ボストンからブエノスアイレスに行くルルーエー船上の六ヶ月がこれである。アルゼンチンでは色んな仕事——ウエスケングハウス電氣會社の送金係、ラプラタの運送會社の羊毛部、ブエノスアイレスのシンガミシン會社の事務——をやつた。その次には又別の船旅で、ブエノスアイレスからダーバン行きの家畜運送船の驟馬係りであつた。その後は、ブエノスアイレスの——「漢で」——の長らくの素寒貧生活がつづき、あげくのはて、ニュー・ヨーク——サザムプトン間のアメリカ定期船の三等水夫の契約に署名した。」それから役者、新聞記者、と彼は職を轉々、更に陸上にも放浪生活はつづけられたのである。そしてあの彼にとつて運命的なサナトリウム行き